

「おはなし読解ワーク:上級編」

「解答について」

「おはなし読解ワーク：上級編【物語文集】」をお買い上げありがとうございます。ここでは、「解答」についての、いくつかの考えを、お伝えしたいと思います。

まず、はじめに、この教材には、解答ページが用意されていません。

その主たる理由は、紙数上の制限によるものですが、以下の点についても考慮した結果です。

○今回のワークは、読解教材ではあるものの、物語の「読み進め」が、いちばんの目的であること。

○固定的な解答を記載した場合、それが唯一の正解とされる懸念があること。

読解問題という学習形式は、話の筋書きや表現を楽しむ、という読書的な要素が少なく、「解答を得るための材料さがし」に終始してしまいがちなものだと思います。今回のワークは、1パートを除き、連続したストーリーで綴られている物語であり、それらを小話化して読解問題としたものです。後記するように、設問への解答も、もちろん大切な学習なのですが、まず、お話を読む、という活動に親しんでもらいたいと思います。そのような点で、解答の適否や正解要求は、あまり厳しくなりすぎず、子どもひとりひとりの理解能力や表現能力に合わせて、柔軟にご対応いただければと思います。初級・中級編と比較し、難度は高くなっているものの、解答（正答）は、ご家族や療育者の方が、十分に判断し得るものだと思います。お子さんの現状に合せた、臨機応変な答え合わせをしていただければと思います。

しかし、内容理解の判定も含め、設問への解答が重要であることは、間違いありません。

そこで、設問—解答の具体例を示しながら、解答についての考え方を、述べたいと思います。

◆最初に、解答とは何か、ということについて触れておきたいと思います。

解答には、次のような役割もしくは意義があります。

① 問題本文（提示されている文内容）の理解状況を知る

② 解答内容に関する表現能力を知る

③ 母国語の言語知識の習得状況を知る

④ 「問題—解答」という学習構造についての認識状況を知る などです。

「知る」というのは、指導者が、学習者の状況を判定できる、という意味です。

これらは、指導者側からの解答の意義ですが、学習者側にとっても、設問と向き合うことにより、本文の理解が深まる（重要部分の示唆、語彙・文法への気づき etc…）、という大切な意義があります。

まず、①問題本文（提示されている文内容）の理解状況を知る、についてですが、これは、とくに国語教科的な読解問題の場合に、第一に意識される「解答」の役割です。解答が正しければ、その部分に該当する本文の理解は得られており、誤答なら得られていない、と、通常は判断されますが、一概にそう断定できない場合もあります。たとえば、解答が正答であっても、文法構造などからパタン的な抜き出しを行っているだけで、内容を本質的に理解しているのではない場合があります。それから、表現能力の未熟さにより、内容は理解されているものの、うまく解答が作れない、という場合もあります。

それが、次の、②解答内容に関する表現能力を知る、にあたる問題です。この点での未熟さが示唆される場合は、問題への解答を機会として、表現方法への学習に、つなげて行く必要があります。

③母国語の言語知識の習得状況を知る、は、本文中から解答部分の抜き出しを行う際などに、よく発現されます。たとえば、「何が飛び立ったのか？」という問いに対して、『魚をくわえた白い大きな鳥』というのが、完全な正答である際に、『鳥』とだけ答えを書く場合、日本語における語の修飾—被修飾の関係が、暗示的（運用的）な知識として体得されていないことが示唆されます。

④「問題—解答」という学習構造についての認識状況を知る、については、【出題者—問題—解答者】と

いう三項関係の成立が問われています。たとえば、“鳥は、どうしたのか？”という設問に対して、『パタパタと飛び立ったのです』と、原文どおりに解答している場合、この解答には、“あなたは、この設問をどう判断しますか？”と問いかけている出題者の存在や意図、また、問いかけられている解答者自身への認識、が希薄だといえます。もし、それらが直感的に把握されていれば、『飛び立ったのです』という、物語を叙述する者の視点で、解答を記載することに違和感を覚えるはずだからです。

このように、解答から得られる学習者の問題点を、適切に把握し、改善を図って行くことが、読解学習の重要な柱になります。

◆前置きが長くなりましたが、上記の事柄を踏まえて、以下、設問—解答の具体例を示したいと思います。ワーク中の第2話「いつもふたりで」問題1を素材として検討します。同ページをご参照ください。

まず設問1「二匹のウサギは何という名前でしたか？」と設問2「野原には何の花が咲いていましたか？」については、それぞれ、『ハムとフム』『アカツメグサ』が、解答となり、これらについては、名詞1語の抜き出しですので、解答の判定・解釈に難しさはないものと思います。

つぎに設問3「ハムの家は、どこにありましたか？」に対する、解答は『野原の北のはずれ』になります。この解答部分は、助詞で連結された野原の北のまでが、「はずれ」を修飾（もしくは規定）して句を形成しています。今回のワークでは、設問1・2のような単一の語のみが解答となる設問は少なく、ほとんどが、このような句、もしくは文を解答しなければならず、解答の難度が高いといえます。設問4「朝、お日さまがのぼると、二匹は、どうするのですか？」に対する解答は、『それぞれのおうちにむかって、歩きだす』です。「～歩きだします。」というように、文をそのまま抜き出してしまう子どもが多いのですが、前記したように、「問題—解答」の学習構造の認識に未熟さがあると思われます。

設問5「ハムとフムは、毎朝どこで、出会うのですか？」への解答は、『野原のまん中』で、句の抜き出しになります。最後の設問6「「おはようハム」と、いったのは、だれですか？」への解答は『フム』。これは本文中に、「と、いいました。」のような引用表現が書かれていないので、文脈や発話内容から、推測しなければなりません。設問1・2・6については、解答の適否がはっきりと下せるもので、誤答であれば、読み直しをさせ、正答を気づかせる必要があります。（しかし、実際の指導場面では、少し間違っている、○をつけてしまうことがよくあります。発達障害の子どもの学習は、誤答に対する訂正に時間をかけるよりも、より多く正解する・させること、が効果的ではないかと思っています）設問3・4・5は、句の抜き出しが、不完全な場合が、実際には多いと思います。設問3に対する『はずれ』や『野原の北』、設問4に対する『歩きだします』、設問5に対する『まん中』などの解答に対しては、前記したように、子どもの現状能力（言語能力だけではなく、不正解に対する耐久力なども含めて）に合わせて、適否を判断し、それぞれの理解力に応じて、修正を行えば良いのではないかと、思います。しかし、不完全解答の原因が、たとえば、その部分の文法構造の未習得にあるとすれば、本文からの抜き出し部分を指示するだけでなく、文法自体の学習にも取り組んで行く必要があると思います。また、解答者自身の言葉で述べず、本文の叙述をそのまま抜き出してしまふ、という「視点」の問題点がある場合も同様で、読解問題の中だけで解決を図れるものではありません。さまざまな学習課題を通しての、抽象的思考力の育成が求められます。

以上、ごくわずかな例しか挙げられなかったのですが、ことばのテーブルでの解答に対する考え方について、記載させていただきました。もちろん、ここで述べた考えは、絶対的なものではありません。ご家族の方や療育者の方のご判断で、教育手法も含め、多種多様に、今回のワークをご利用いただければと思います。